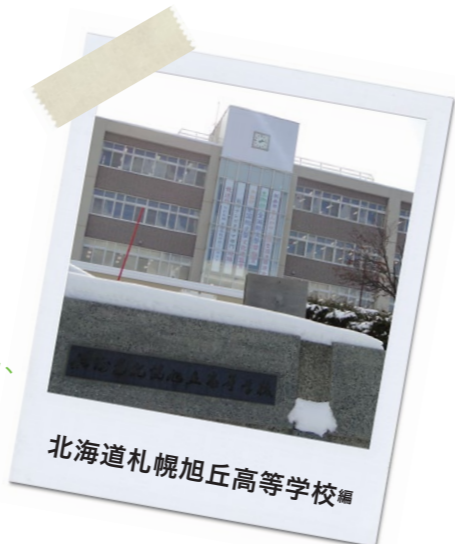




英語教師塾 in 応援マガジン

キムタツ先生こと灘校の木村達哉先生を塾長として、全国の高校教師が集結して授業研究を行う「英語教師塾」。このコーナーでは、このワークショップの誌上版として、現場で奮闘する先生方の姿をレポートし、授業見学をしたキムタツ先生にコメントをいただきます。また、キムタツ先生が教育現場の生の疑問に答えるコーナーも掲載。明日からの授業に生かしたくなる指導方法のヒントが満載です。

取材・撮影_応援マガジン編集部



北海道札幌旭丘高等学校

「実力」と「資質」を育む21世紀「進学ADVANCE」構想

北海道札幌旭丘高等学校は、昭和30年代の初め、人口の都市集中化などによって深刻化した札幌市内の高校入学難を解消するため、地域住民が中心になって進めた市立高校新設運動によって誕生しました。今では、地域の生徒の進路希望を実現させ、多くの大学合格者を輩出する進学校として認められています。

新しい校舎は「学校の主役は生徒である」という基本理念に基づき、「自己管理・自己責任」「共用」の原則などをキーワードに、ガイダンス機能を重視したオープン型の職員室や情報化社会に対応した施設・設備など、個性的な設計が多く採用されています。

こうした特色ある校舎を最大限活用しながら、「社会のさまざまな分野で貢献できるリーダー的人材の育成」を目指す学校として、一人一人異なる時間割を設定できる「単位制」を導入。21世紀「進学ADVANCE」構想の下、志望校合格に必要な「実力」と大学生に求められる「資質」の習得を目指しています。

今回は、高校2年生の授業と、高校3年生の「北大対策講座」を見学しました。

徹底した授業準備によって生み出される理想的な授業

最初は高校2年生を受け持つ庄末先生の授業を見学。教科書のレッスンはすでに終了しているため、夏期講習時の教材（リーディングのワークブック）の未習範囲を扱います。授業はまず、『ユメタン②』を使った単語学習からスタート。先生の発音に続けて生



あらゆる活動を通じて授業の中で生徒に英語をしっかりと使わせる庄末 剛先生

徒も大きな声を出してリピートしていきます。

難しい発音の単語は繰り返し生徒に発音させ、過去に習った単語と一緒に復習させたり、同意語や派生語も効果的に紹介しながら単語を丁寧に導入。さらに、CDを流してもう一度生徒に発音させ、仕上げにクイックレスポンスで回答する単語テスト「ユメタン・クイズ」を行いました。生徒にはテストの点数をグラフで記録するプリントが配られており、自己採点した後、点数をグラフに記入していきます。庄末先生は毎授業、冒頭の10分を使ってこうした音声による単語指導と小テストを行っています。

その後、テキストを使った指導に入りますが、指示のほとんどが英語で行われました。テキストを一切開かず英文を読み、生徒に質問していたのがとても印象的でした。庄末先生はテキストではなく、生徒を見ながら英文を読み上げるため、生徒の意識がテキストだけに向かず、先生と生徒と目が合わせる時間が非常に多かったように思います。

また、生徒に示す例文もテキストやノートを見ずに板書していたため、授業展開はとてもスムーズ。教科書本文とその和訳、さらに授業中に紹介する例文までも暗記しておくことの効果が随所に見られました。また、この徹底した授業準備は、英語で授業を行うための大きな助けにもなるそうです。

また、オリジナルのリスニング練習シートを使ったディクテーションにも多くの時間が割かれ、庄末先生の授業が「音声」と「生徒が英語を使う時間」を重要視していることがよく分かります。ペアワークも多く行われましたが、生徒は先生の指示に素早く従い、どの生徒も大きな声で音読に取り組んでいました。授業中の解説はポイントを絞って最小限にとどめられ、主体が常に生徒にあり、生徒が自ら考え、英語を使うという理想的な授業でした。

難解な英文もポイントを絞った解説で着実に読み解いていく

続いて坂間先生による高校3年生の北海道大学志望者を対象とした講座を見学。2時間に渡る特別講座のうち、最初の1時間を木村先生と一緒に見学しました。

この講座には、センター試験受験を終えたばかりの約60名の生徒が参加。北海道大学の入試対策問題を素材に進められました。英文のレベルは非常に高いものの、坂間先生の丁寧で分かりやす

い解説によって生徒は徐々に解答を導き出していきます。解説は決して一方的なものでなく、生徒に気付きをしっかりと与えながら進められ、生徒の理解を助けるため、少しずつ整理、まとめながら解説していました。

また、正解を導き出す上でポイントとなる部分では解説の声を大きくしてリズムを変えるなど、声に抑揚を付けることでポイントを強調し、生徒を上手にコントロール。生徒もその都度板書を写していた手を止め、先生に注目していました。

最も印象的だったのは、解説の途中で「基本的な文法力が問われる」ことや「既習事項で解ける」ことを強調していた点です。この一言で生徒は初心を忘れず自信を持って本番に臨むことの重要性に、改めて気付かされたのではないのでしょうか。また、随所で繰り出された坂間先生のジョークも、生徒の受験に対する緊張や不安を和らげる上で大きな意味を感じました。



生徒の緊張を和らげながら入試問題を的確に解説する坂間卓朗先生



英語科の取り組みについてお話しされる木村達哉先生、札幌旭丘高校 英語科主任の高山 朗先生、庄末 剛先生（写真左から）

北海道大学の入試本番が直前に迫っている時期の訪問だったため、見学前には緊張感に満ちた講座を想像していましたが、坂間先生のお人柄が出て、適度な緊張感がありながらも、終始和やかな雰囲気が進められた講座でした。

授業見学の前には、英語科主任の高山先生と庄末先生から札幌旭丘高校の英語科の取り組みについてお話を伺いました。札幌旭丘高校では、「相手の文化や言語を理解し、自分の伝えたいことを分かりやすく伝える能力を養う」ことを目標に、これに応じた国際交流プログラムや単位制における英語の選択科目が設けられているようです。こうした英語科での取り組みからも大学進学をゴールとせず、進学後に必要となる資質や能力の育成にもしっかりと力を入れていることが分かります。

Kimutatsu's Comment

徹底された「教材研究」によって生徒はしっかりと理解を深められる

庄末先生は僕のセミナーによくいらっやっでいて、『ユメタン』を愛用してくださっているのですが、『ユメタン』をお使いになる理由が手に取るように分かりました。というのも、庄末先生の授業は「英語が使える生徒を育成する」ことを目的にしているのが明白だったからです。また、教員が英語で授業をするのは最近ではよく見られる光景となりましたが、庄末先生の授業は一味違います。読解素材を先生自身が読み込んでおられ、手元のテキストを全く見ずに授業をされているのです。

授業とはそもそも教える側と教わる側が対話をしながら続けていくからこそ、大学の講義などとは違う面白さがあるのですが、読解の授業では人間と人間が同じ箱の中にも関わらず、互いに目と目を合わせて対話をする場面がほとんど見られないというのが、従来の読解授業の問題点ではないのでしょうか。その点で、自ら暗唱していらっやっした庄末先生の授業は全く違った雰囲気、生徒たちもノートを見るの

はチラ見程度で、あとは顔を上げて先生と対話をしながら授業が進んでいきました。

次に坂間先生による北大志望者への授業を見学しました。坂間先生の授業は、単に設問該当箇所だけを説明するのではなく、予備的に読んでおかねば正解を引き出せない箇所についても解説されていました。また、単調なリズムで上から訳し下ろしていくというスタイルではなく、「全く関係のない箇所」、「読んでおかないと正解が導き出しにくい箇所」、「まさに該当箇所」の3パターンに分け、それぞれにスピードも声の大きさも変えながら進められていましたので、生徒たちはどこが重要なかを理解しやすかったのではないのでしょうか。

坂間先生のお人柄も出ていて、二次試験直前の授業なのにフレンドリーな雰囲気の中で行われており、とても良い授業だなと思いました。寒い札幌ではありましたが、お二人の先生のおかげで、心が温かくなりました。先生方ありがとうございました。



北海道大学を志望する生徒に応援メッセージを送る木村達哉先生

土台を固めるからこそ
伸びる!!!